“小さな群れよ、恐れるな。あなたの父はよろこんで神の国をくださる”（ルカ１２－２３）

小さな群れ

カトリック美唄教会
２０２３年　１月　No.308
２０２２年１２月２５日発行

七つの七倍

Fr.Narciso Cavazzola ofm

毎日曜日、キリスト者は教会でミサを捧げます。
「聖書を読み、司祭の説教を聴き、賛美歌を歌います。司祭としてミサを捧げるたびに、私は心が痛くなる箇所が二箇所あります。　一つは「主の祈り」を唱える時です。
「主の祈り」は、イエスさまが教えてくれた祈りですが、神に向かって"天におられる私たちの父よ"と呼びかけます。私だけの父ではなく、私達みんなのお父さん、わたしの嫌いな人のお父さんでもあります。また"私達が人を許すように、私達の罪を許してください"という厳しい祈りを唱えます。まだ許せない人がいる時に、その祈りを唱えることは、正直に言って、非常に複雑な心境です。　もう一つは、平和のあいさつを交わすときです。
典礼の中で進められているあいさつですが、お互いに向かい合って"主の平和"とあいさつします。本当は会いたくない人、まだ許せない人にこそ神の平和を交わすべきなのですが、なるべく相手と目を合わせないようにしてあいさつすることもあります。
マタイ福音書（十八-二十一～三十五）で、イエスさまは、許しの大切さを、例え話で語っておられます。　「兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」というペトロの質問に、「七回どころか七の七十倍まで赦しなさい。」と答えておられます。　四月二日に亡くなられた前ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、１０年程前、聖ペトロ寺院の広場で、トルコ人に撃たれて重症を負われましたが、その犯人に会いに刑務所へ行き、一緒にコーヒーを飲みながら、心からの許しを与えられました。
アメリカのブッシュ大統領は、キリスト者として「主の祈り」を毎日唱えるそうですが、２００１年９月１１日のテロ以来、彼は許しの道よりも正義の道を選びました。
３０００人を殺した人達を捕らえて罰を下すといって戦争を起こしましたが、その結果はアメリカ人だけで五千人以上、イラク人はその３～４倍の死傷者がでて、未だに平和は実現しておりません。もしブッシュ大統領が、アメリカ国民と共に、その犯人たちを許していたならば、平和に近づいていたに違いありません。戦争は世が始まって以来、ずっとありますが、イエスさまは平和の道を教えてくれています。

"神のごとくゆるしたい
ひとが投ぐるにくしみを
むねにあたため
花のようになったらば
神のまえにささげたい"
（八木重吉）

主任司祭　ナルチゾ神父

2023年1月　主日ミサ・平日のミサ　予定

美唄教会　小さな群れ
2023年　1月　№308
2022年 12月25日発行

1月　平和を求める祈り

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時　間		
1	日	神の母聖マリア	午前11：00		世界平和の日・元旦
6	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
8	日	主の公現	午前11：00		ミサ後運営委員会
13	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
15	日	年間第2主日	午前11：00		
20	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
22	日	年間第3主日	午前11：00		
27	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
29	日	年間第4主日	午前11：00		世界こども助け合いの日

《　平日のミサ　》　**金曜日のみ　午前10：30**　6・13・20・27日です
《 聖書を親しむ 》　平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日（敬省略）	清掃当番	花　当番
1日　神の母聖マリア　河野　智子 21日 アグネス　東可奈子・板垣春江	**第2週　幼稚園** **第4週　三間**	**大城**

【お知らせ】

◎1月29日世界こども助け合いの日特別献金です。

旭川地区

宣教司牧評議会からの

お知らせ

２０２１年の旭川地区大会をきっかけに

立ち上げられた、旭川地区内で生活される

外国人を支援するための

「ナムタイ -カトリック旭川地区手をつなぐ会-」が発足し、

旭川地区内の外国人信徒を支援するかたちになっています。

２０２２年は「全道カトリックベトナム青年大会」が、

8月13日~14日には札幌市滝野にて開催され、

大勢のベトナム人信徒が集まり大成功だったとのことです!

勝谷司教も部分参加されました。

旭川地区からは、「旭川五条」から17名、「旭川六条」から1名、

「留萌」から2名、合計20名の青年たちが参加され、この20名

の方々に対して参加費や交通費等に充ててもらうために、

一律5千円(計10万円)の支援をナムタイからさせていた

だきましたこと、旭川地区信徒の皆さんにご報告申し上げます。

この大会と、参加者に対するナムタイの支援活動について、

「カトリック新聞社」により取材記事が掲載されました。

HOLIC WEEKLY カトリック新聞 2022年12月11日 (毎週日曜日発行) 第4651号

仲間と一緒に祈りたい

札幌教区(勝谷太治司教)で初めての「全道カトリックベトナム青年大会」(同教区主催／以下「ベトナム青年大会」)が8月13日と14日に札幌市の施設で開催され、北海道各地から約100人の青年が集った(本紙9月25日付1面既報)。一度も開催したことのないベトナム人の青年大会をコロナ禍で行うのは、試行錯誤の連続だった。開催までの経緯や、大会の感想について青年らに聞いた。

願い実らせ 集う喜び実感

札幌教区初「ベトナム青年大会」開いた若者たち

ベトナム青年大会は「札幌カトリックベトナム青年会」(以下「ベトナム青年会」／札幌市)が中心となって準備し開催された。その原動力となったのは、故郷を離れ、技能実習生や留学生として暮らす青年たちの「仲間と一緒に祈りたい」という願いだ。同青年会リーダーのグエン・チュオン・ウィさん(31)もそう願うようになっていた一人。

ウィさんは、ベトナム中北部ハティン省出身。主日のミサに300人が集う、青年行事も盛んな小教区に所属していたが、8年前に技能実習生として来日し、北九州で働いた2年間はミサに参加したことがなかった。

「日本語ができず、周りにベトナム人もいなかったため、ミサの時間も分からなかったためだ。

後に帰国したウィさんは、2019年に留学生として再び来日。札幌で暮らすようになると、青年活動の少ない日本の教会の現状を知るようになった。まるで年に1~2度あったベトナム語のミサや集まる機会を失った、ベトナム青年会の青年たちと出会った。

円山教会で、ウィさん㊨と加藤神父㊥

そこでウィさんは、その青年たちに声をかけて月1度、主日ミサ後に札幌教区カトリックセンター(札幌市)に集い、ベトナム語で祈るようになる。同市の円山教会主任だった加藤鐵男(まるやま)神父(札幌教区)から「教会に来たら」と誘われ円山教会で祈るようになった。

こうしてベトナム青年会が"復活"。道内唯一のベトナム人司祭、チャン・タン・ラム神父(フランシスコ会)も加わり、この青年大会は企画された。

負担を分け合う

コロナ禍の中での大会準備は苦労続きだったが、「神様の助けで、神様のお手伝いをする」意識に支えられたという。それは言葉で説明するのは難しいが「自分の心で見て、感じられると思うので、ベトナム青年会では毎週、仲間とみことばに耳を傾けて祈りました」とウィさんは言う。

そこで思い起こされたのは「教会が遠くて年に1~2回しかミサに参加していない」ベトナム人の青年たちの存在で、そうした仲間も参加できる大会を目指すことになった。

準備は「小さな負担を分け合う」工夫で進んだが、それを支えたのは「神様が用意した」①青年間のSNS(交流サイト)でのつながり②日本人信徒による協力―だった。

現在、札幌教区にある30人以上の規模のベトナム人共同体は、札幌、函館(はこだて)、旭川(あさひかわ)、帯広、苫小牧(とまこまい)、留萌(るもい)などに点在している。

今回、旭川地区から参加を希望した青年には、同地区の信徒による外国人支援団体「ナムタイ」(ベトナム語で「手をつなぐ」の意味)から一人当たり5000円の補助があり、技能実習生20人が参加。一行は旭川と留萌からバスで札幌へ向かい、さらに電車などを乗り継ぎ約4時間かけて会場入りした。

その一人、建設業に携わるファム・バン・フエさん(30／来日6年目)は「初めて札幌に出るのでわくわくしました。みんなに会い、ダンスと音楽も楽しかった」と話す。

食品会社に勤めるグエン・ティ・フィエン・チャンさん(26／来日7年目)は、青年大会で「集まる」や「愛」という言葉が心に残ったと振り返る。

食品加工に携わるグエン・ティ・ニュンさん(24／来日6年目)は大会後、以前ベトナムで家族としていたように再び毎朝・毎夕に祈るようになり「信仰が戻りました！ 大会を準備してくれた人たちと、いつも私たちに関心を持って支えてくれる教会の人たちに感動している」と言う。

8月に開いた「ベトナム青年大会」の参加者たち。青年たちが"特注"した会場のバナー(写真奥)にはカトリック教会が目指す「シノドス的」(ともに歩む)在り方を象徴するイラストが描かれている

大会に参加できなかったグエン・ティ・ミー・ホアイさん(31／来日4年)は「大会の写真を見たら、すてきでした。心が若くなる場ですね」と話した。

出会えた喜び

大会はさまざまな協力があって実現した。

会場の巨大なバナーは、ラム神父が青年のアイデアを基にデザイン。そして青年らが費用を抑えるためにベトナム国内のメーカーに発注し、現地から来日する友人に運んでもらって届いたものだ。

大会には、日本人も数人が来場した。開催のための書類作りなどで協力した日本カトリック難民移住移動者委員会・札幌教区担当の西千津さんは、仲間と出会えた喜びを素直に表す青年たちの姿を通し、彼らの信仰に触れたと目を輝かせる。

仕事で多文化共生や外国人の受け入れ・支援に携わる湯本礼士(れいじ)さん(札幌市在住)は「仕事先が農場などのベトナム人(技能実習生)なら(他地域の人と)集う機会は限られる」と語り、この大会の実現を喜んだ。

こうした大会に集うベトナム人の青年には言葉や時間、金銭的な制約があるが、特に技能実習生には実習先の許可も必要になる。参加を禁じている実習先もある。今回、ある実習先の求めに応じ、自身が「保護者」になることで参加できた実習生もいたとウィさんは言う。

「課題はありますが、来年も開きたいと青年たちはやる気満々です。最近、札幌での祈りに日本人の若者にも声をかけていて、次の大会には参加してもらえたらと思います」